主 論 文 の 要 約

Risk factors associated with Barrett's epithelial dysplasia
（バレット上皮の異型化に関する危険因子の検討）

東京女子医科大学消化器内科学教室
（主任：立元敬子教授）㊞
藤田　美貴子

World Journal of Gastroenterology 第 20 巻　第 15 号　4353 頁～4361 頁
（平成 26 年 4 月 21 日発行）に掲載

【目　的】

バレット食道は腺癌の発生母地と考えられ特に特殊円柱上皮(specialized columnar epithelium:SCE)が重要とされている。SCE は腸上皮化生と同等とされているため、バレット腺癌の発生に関与していると推測される。欧米では肥満がバレット食道及び腺癌の発生の大きな原因とされている。今回、バレット食道の細胞異型に関わる危険因子を臨床病理学的に検討した。

【対象および方法】

2004 年 3 月から 2008 年 12 月まで当院で上部内視鏡検査を施行しバレット食道と診断した 115 例を対象とした。バレット食道は生検病理組織像を①SCE type、②gastric fundic type、③junctional type の 3 型に分け、そのうち腺癌の発生母地と考えられている SCE type について、異型腺管の有無を身体学的検査、血液生化学検査、p53 染色、逆流性食道炎、*H. pylori* 感染との関連について検討した。

【結　果】

バレット食道のうち SCE type は 56.5%(65/115)で、異型腺管の発現率は 30.8%(20/65)で他のタイプより有意に高かった。この SCE type における異型腺管発現の危険因子を単変量解析すると、*H.pylori* 非感染、p53 蛋白の強

発現、過体重、低拡張期血圧で有意差を認めた。多変量解析を行ったところ、p53 蛋白強発現(p=0.004、OR=13.107)、*H.pylori* 非感染(p=0.066、OR=0.187)、低拡張期血圧(p=0.021、OR=0.874)が独立した危険因子であった。また、異型腺管を異型なし、low grade、high grade に分けて 3 群で比較し危険因子を一元配置分散分析で解析すると、バレット粘膜長、*H.pylori* 非感染、p53 蛋白強発現、過体重、逆流性食道炎、低拡張期血圧で有意差を認めた。

【考　察】

これまでにバレット食道に寄与する危険因子の検討は複数行われてきているが、異型腺管については明確な結果がでていない。本研究では異型腺管の発現における危険因子の検討を行い、p53 蛋白強発現、*H.pylori* 非感染、低拡張期血圧が独立した危険因子であることが示唆された。バレット腺癌の早期発見に努めるために、今回示した危険因子を元にハイリスクグループを設定し、バレット食道を定期的にサーベイランスするシステムの構築が今後の課題である。

【結　論】

SCE type での異型腺管の発現には、p53 蛋白強発現、*H.pylori* 非感染、低拡張期血圧が独立した危険因子と考えられた。